

日英母語話者の事態把握の異同における日本語習得の再考
 - 受動表現の産出を中心に -

Rethinking Japanese Language Acquisition of Dissimilarity in Construal between
 Japanese and English Native Speakers : Focusing on Output of Passive Expression

鄭在喜, 早稲田大学
 Chung Jaehee, Waseda University

1. はじめに

話者の言語表現は、同じ出来事を述べる場合であっても話者がその出来事をどう捉え、それをどの文法や語彙を用いて表すのかによって異なるため、意味が異なってくる(鄭 2019)。以下の例 1) をみよう。

- 例 1) [財布を盗まれたことを届け出て]
 英語 : Someone stole my wallet.
 日本語 : 財布を盗まれました。

(池上 2006a : 162)

池上は、例 1) のような財布を盗まれたことを届け出る状況で、英語は上述したように起こった事態だけを客観的に使えるのが普通であると述べている。それに対して、日本語は「受身」の形で言語化した方が、被害届けを出すような場ではふさわしい言い方であるとした。池上(2006b)は、こういった現象、つまり同一状況を異なる言語表現で表出することを認知言語学の基本概念である「事態把握」を用いて説明しているが、事態把握とは、話者がある事態に際して何をどう語るのかを話者がそれらの自らにとっての関わりを評価及び判断するという認知的な営みであると述べている。

そして、池上(2011)は、事態把握の基本類型として、主観的把握と客観的把握を挙げている。例えば、道に迷った状況を考えてみよう。日本語では「ここはどこですか」、つまり、事態の外にいた自分を事態の内に自己投入(self-projection)を通じて、事態の内に身を移した話者がそのまま認知の主体としてふるまうことになる。その結果、自身は自らの見えに入らず、したがって「ゼロ」として言語化されることになる。一方、同状況で、英語母語話者は「where am I?」と発言するが、これは、英語母語話者は自己分裂(self-split)を通じて自己を他者化し、自らの分身を認知の主体として事態の外に措定する。その結果、事態の外に分身は事態の内に残された分身が自らの「見え」に入るため、自分を明示的に表現することになるとした。これらの基本類型を図で表すと以下のようなになる。

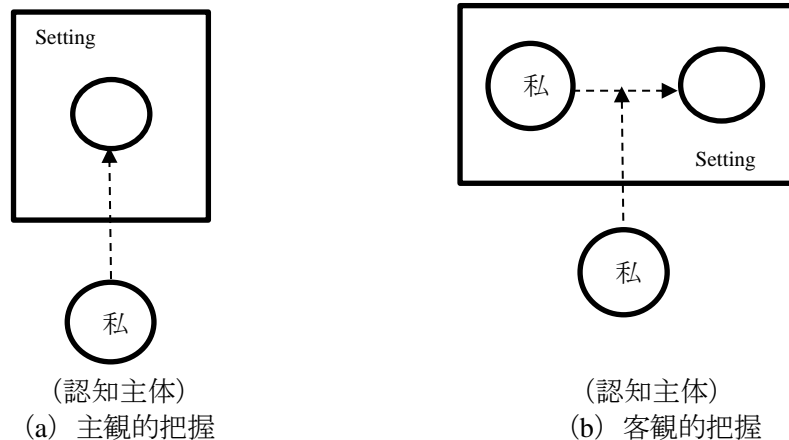


図1 客観的把握と主観的把握 (荒川・森山 2009 : 85)

2. 先行研究

今日は言語話者の事態把握を明らかにしようとする研究が活発的に行われているが、守屋 (2011) は、事態把握に関する言語類型論的比較を行い、事態の主観的把握の傾向があると思われる「ナル的な言語」に日本語を、事態の客観的把握の傾向が見られる「スル的な言語」に英語を挙げている。そして、池上同様、日本語母語話者は主観的把握、英語母語話者は客観的把握の傾向があることを述べている。

濱田 (2012) は、日本語話者は「場面内視点」で事態を捉え、それを「参照点・ターゲット型認知」で把握するとした。次の例2) をみよう。

例2) a. 駅で花子に会ったよ。

b. I met Hanako in the station.

(濱田 2012 : 72)

a の日本語話者は、ある際立ちの大きい事物を通して別のある事物と心的接触をとるという認知型、つまり、事態を参照点構造で把握しているとした。一方、英語話者は「場面外視点」といい、「場面の外に視点を置いて出来事を捉え、その場面の中の誰 (または何) に視点を置いて「A は B だ (A is B)」あるいは、「A が B を～する (A do B)」と表現する。つまり、出来事をトラジェクター (tr) / ランドマーク (lm) で認識する。」と述べている。そのため、出来事の中で一番目立って認識されている人やモノをトラジェクターとして認識してそれを主語として言語化し、次の目立ち度の高い人やモノをランドマークとして認識し、それを目的語として言語化すると述べている。

これらの先行研究から、日本語母語話者と英語母語話者は事態把握の傾向が異なり、それに伴い、その言語的類型が異なることが分かった。しかし、事態把握の傾向を調べる研究の中には、実際の産出文を分析している研究がまだ少ないのが現状である。そこで本研究では、日本語母語話者と英語母語話者の具体的な産出文を紹介しながら、まず日本語母語話者と英語母語話者の事態把握の傾向の異同を調べる。そして、中上級レベルの英語を母語とする日本語学習者が産出した産出文を紹介し、事態把握の異同が日本語の習得に及ぼす影響を再考する。

調査対象としている言語表現は受動表現である。受動表現を対象にしたのは、小野寺（2008）の知見に倣った。小野寺は、受動構文は、本来主語である参与者の次に、認知的に際立つ目的語を、最も認知的に際立つ主語の位置に移動させたものであり、そこには話し手の事態把握が関与しているといえるとした。即ち、事態把握は、話し手がある状況を言語化しようとしている際に、どの対象に、どの程度関わりを持っているのかによるものであるため、本研究では、それが明確に現れる受動表現を対象に調べることで、日本語母語話者と英語母語話者の事態把握の傾向、更に習得に及ぼす影響が見られやすいと考えたのである。

3. 調査概要

調査協力者は、日本語母語話者（JNS、男女 15 名）、英語母語話者（ENS、男女 11 名）であり、ENS は入門レベルの学習者（9 名）と中上級レベルの学習者（2 名）を対象に調査を実施した。調査方法は、ストーリー構築法を参考に調査資料のストーリーを文字で記述してもらい、調査資料は自作漫画を用いた。調査資料においては、調査協力者の資料に対する理解を高めるため、かつ、産出する言語表現に受動表現を用いるようコントロールするため、一部台詞を入れてある。

なお本研究は、日本語母語話者であれば受動表現を用いるのが自然であると考えられる状況を、英語母語話者はどう表すのかを調べるものであるため、日本語母語話者が受動表現としてよく使う語彙を選出した。そしてそれらの語彙が自然に出てくる状況を考えて調査資料を作成したのである。調査資料は JNS 用以外にも ENS 用として英語バージョンを別途に作成した。

調査に当たっては、JNS には「漫画のストーリーを、下線にどのような動詞（表現）が入るのかを考え、漫画全体のストーリーをできるだけ詳しくまとめて記述してください（300 字-500 字以内）。」と指示した。なお、ENS には、「Consider the whole story of the Manga and try to express in sentence in the area of underscore. Please describe as detailed as possible in terms of the whole story in clean handwriting (from 300 words to 500 words).」と指示した。本指示での「下線」は、述部のところを指しており、述部のところにどのような表現を入れればいいのかを調査協力者に考えさせる構成にした。

以下、本調査の調査資料である漫画の日本語と英語バージョンを示す。

本調査資料のうち、各母語話者の受動表現の産出を想定した分析場面は、登場人物である「田中」、「女性社員」、「佐藤」の出来事を表している「場面②：命じられる・be commanded、場面③：怒られる・be scolded、場面④：褒められる・be praised、場面⑤：任される・be entrusted、場面⑥：笑われる・be laughed、場面⑦：来られる・come」の 5 つの場面であり、分析対象となる受動表現は 6 つである（場面の番号は、調査資料の番号を参照）。

本調査資料は、ストーリーや全体的な構成は筆者が考え、絵は専門家に作成を依頼したものであり、本資料の著作権は筆者に帰属する。

<日本語バージョン>



<英語バージョン>



4. 分析方法

調査協力者の産出文は、それがどの程度主観的か、あるいはどの程度客観的かを調べるため、数値化を試みた。なお、数値化のために用いた知見として、本研究では、牧野（1996）に倣い、分析を行った。牧野は「日本語のウチという空間を「かかわりの空間」と定義している。そしてウチの空間では、人々は五感（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）を使って直接なかかわりを持ってるとし、五感でかかわりの持てない空間がソトで、ウチの人はそういうソトの人とは異なる共通の判断力を持っているはずであると述べている。そしてこのウチとソトをつなぐ心理の糸として不可欠なのが「共感（empathy）」であるとし、ウチの人とはこの共感を抱ける相手ということになる」とした。また日本語では、1人称、2人称と3人称の代わりに「ウチ人称」と「ソト人称」を文法用語として採用すべきであるとし、それぞれの定義を以下のようにしている。

ウチ人称：話し手か話し手が発話時に心理的に自分のウチの人だと認知している人

ソト人称：話し手が発話時に心理的に自分のソトの人だと認知している人
(牧野 1996 : 73)

そこで、本研究では、この「ウチ・ソト」概念に倣い、事態把握に当たり JNS と ENS の主観性を測定するため、ウチ人称に視点を固定した表現は主観的把握、そうでない場合は客観的把握と見なして以下の測定方法を講じた。

表 1 主観性の測定方法

	動作の方向性	言語表現	視点の場所	得点	例
主 観 性	ウチ→ソト	スル	ウチ	1	ウチがソトに～する
	ウチ←ソト	サレル	ウチ	1	ウチがソトに～される
	ソト→ウチ	スル	ソト	0	ソトがウチに～する
	ソト←ウチ	サレル	ソト	0	ソトがウチに～される

本調査資料は前述通り、主な登場人物は 3 人いるが、ストーリーの主人公は「田中」であり、その次に彼の同僚である「女性社員 → 佐藤 → その他（部長、周りの人）」の順の中心度になる。つまり、表 1 の「ウチ → ソト」は「田中 → 女性社員」、「女性 → 佐藤」、「佐藤 → 部長」などの関係を示す。一方、「ソト → ウチ」は「女性社員 → 田中」、「佐藤 → 女性社員」、「部長 → 佐藤」などの関係を表すものである。そしてウチ人称に視点を固定した表現が見られた場合は「1」点、ソト人称に視点をおいた表現が見られた場合は「0」点として得点を測定した。主観的事態把握がウチ人称に視点を固定するとなると、上記の測定方法で合計得点が高いほど主観性が強くなると考えられる。本稿では、表 1 で黒枠に囲まれている受動表現の結果のみを報告する。

5. 調査結果

まずは両母語話者の受動表現における事態把握の傾向を調べた結果を以下の表に示す。

表 2 JNS の受動表現に現れた事態把握の傾向

	場面②	場面③	場面⑥		場面⑧	場面⑨
受動表現	命じられる	怒られる	褒められる	任される	笑われる	来られる
JNS の得点	14	10	10	9	8	8
主観性	0.93	0.67	0.67	0.6	0.53	0.53

表 3 ENS の受動表現に現れた事態把握の傾向

	場面②	場面③	場面⑥		場面⑧	場面⑨
受動表現	命じられる	怒られる	褒められる	任される	笑われる	来られる
ENS の得点	2	0	1	1	1	1
主観性	0.2	0	0.1	0.1	0.1	0.1

上記の表からわかるように、JNS は調査対象としている 6 つの場面すべてにおいて「0.5」以上の数値が見られ、事態を捉える際に主観性が強い傾向が確認できた。反面、ENS はすべての場面で「0.5」以下の数値となり、かつ概ね「0」点に近い数値が見られ、JNS とは正反対ともいえる傾向が見られた。このような結果から ENS は事態を客観的に把握する傾向を好むことが確認できたといえよう。

6. 考察

では、調査対象としている 6 つの場面について産出した具体的な産出文をいくつか取り出して紹介しながら考察を行う。

まずは「場面②」の産出文を紹介する。「場面②」は、主人公である田中が彼女とデートの約束があるのに、部長から残業を命じられ、デートに行けなくなったことを、同僚の女性社員に不満をいう場面である。

	<JNS の産出文>	<ENS の産出文>
場面②	<ul style="list-style-type: none"> ・今日は恋人と会う約束があったのに、残念そうにしている。 ・田中さんは今日デートの約束があるのに、<u>部長に残業を頼まれてしまった</u>と言いました。 ・デートがあるのに部長から拒むことのできない<u>残業を任されてしまった</u>と愚痴が始まる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Tanaka says that his boss gave him extra work that he did not anticipate, he is dejected because he was planning on going on a date with a woman called Erica. ・ Tanaka shares that he is missing a date with Erika because of the heavy workload <u>given to him by the manager</u>. ・ He has been <u>given a lot of work from his boss, even though he had been a date that night.</u>

(下線筆者)

「場面②」は、JNS は 15 名中 14 名が、「残業を頼まれる」「残業を任される」などの受動表現を用いて表していた。一方、ENS は、9 名中 2 名のみが「given to

him by the manager」 「given a lot of work from his boss」と受動表現で産出しており、その他の学習者は残業を命じた部長を主語にしていた。これには、上述した濱田（2012）が述べたように、ENSは出来事の中で一番目立って認識されている人やモノをトラジェクターとして認識してそれを主語として言語化していることが窺えた。

次は、「場面③」の産出文である。この場面は、田中の話を聞いていた同僚の女性社員が自分も最近部長の不機嫌のせいで些細なことで部長に怒られたと話す場面である。

	<JNS の産出文>	<ENS の産出文>
場面③	<ul style="list-style-type: none"> ・女性によると、最近部長は機嫌が悪いようで、昨日彼女も部長に怒られたそうです。 ・女性も最近、部長の機嫌が悪いせいで、嫌な思いをしたことを話す。女性は些細なミスで部長に一時間も説教された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ The female worker comments that the manager's bad mood has affected her as well. ・ The female colleague replies that the manager has been in a bad mood recently and had yelled at her earlier.

(下線筆者)

「場面③」は「怒られる」という誰もが一度は経験し、かつ共感しやすい感情を表している状況である。JNS は半分以上が「怒られる」「説教される」などの受動表現を用いて女性社員の気持ちに共感を表していたが、ENSからは受動表現は見られなかった。このことから ENS は女性社員をトラジェクターとして認識はしているものの、その状況に体験的に共感はできていないことが窺えた。

「場面⑥」は、田中と女性社員が話しているところに、もう一人の男性社員である佐藤が来て、自分はむしろ部長に褒められ、次のプレゼンテーションも任されたと自慢する場面である。つまり、「褒められる」と「任される」の2つの受動表現の産出を想定している場面である。

	<JNS の産出文>	<ENS の産出文>
場面⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・すると、佐藤君は得意気に自慢を始めた。企画書の件で部長に褒められたことや、来月のプレゼンを任されたことなどを2人に話した。 ・佐藤さんの企画やプレゼンなどに信頼を置いている様子。 ・すると佐藤さんは、昨日の企画書の件で部長に非常に高く評価してもらい、来月のプレゼンも任されたと話した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Another colleague greets the two, he seems to be an employee that is well liked by the manager, the brags about work mentioning a work project and a presentation talking plane next month. ・ The co-worker responds by saying that he was assigned a project yesterday. He goes on to say that he will give a presentation next month.

(下線筆者)

JNS は、15名中9名以上が受動表現を用いて佐藤の状況を表していたが、ENSは上記に挙げている1名がそれぞれの受動表現を用いていた。本場面で産出を想定していた「褒められる」も「場面③」同様、人間の普遍的な感情であり、共感しやすい感情であると思うが、このような場面から ENS に受動表現があまり見

られなかったのは、ENS と JNS 間では体験的に共感しやすい出来事というのが異なることも窺え、それには文化の背景や差異も考えられよう。

最後に、「場面⑧」と「場面⑨」は、繋がる状況であるため、まとめて紹介する。この場面は、佐藤の自慢を聞いていた田中が最近自分に起こったついてないことをいう場面である。「場面⑧」は、雨の日に滑ってしまい、周りの人々に笑われたこと、「場面⑨」は、重要な試験の前日に友人に來られて勉強ができなかったことを、女性社員と佐藤に愚痴っている場面である。

	<JNS の産出文>	<ENS の産出文>
場面⑧	<ul style="list-style-type: none"> ・この間雨の日には駅で滑って階段から転んで周りにいた人に笑われたり、～ ・雨の日には駅で気持ちのいいくらい転んで見知らぬ人に失笑を買ったことや、～ ・この間の雨の日には駅で転んでしまったし、～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Tanaka replies that he had recently slipped and fell at the subway station on the rainy day and <u>was laughed at</u>. ・ Sato as many had things have happened to him lately such as falling at the train station because of it being slipped from the rain. Many people laughed at him.
場面⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・日曜日に英語のテストがあったので、土曜日は勉強しようとしたら、先輩から急に飲みに誘われて結局全然勉強する時間がなかった。 ・またある日は英語のテストのために家で勉強していると、友達が酒盛りを始めたのである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ For the worse, he had tried to study for his TOEIC test on the Sunday at home, but some friends barged in and kept pestering him to drink alcohol. ・ To add on, Tanaka mentions how <u>he was distracted from studying English</u>, for a TOEIC test on Sunday, <u>by a friend</u> who showed up at Tanaka's house with an alcoholic drink.

(下線筆者)

「場面⑧」と「場面⑨」はそれぞれ「笑われる」と「來られる」という自動詞の受動表現の産出を想定している場面である。しかし、JNS からその使用は少なく、特に「來られる」は1名しかおらず、多くのJNSが「友人にお酒に誘われ～」と産出していた。そして、ENS から受動表現は各場面で1名にしか見られなかった。JNS の自動詞受身の使用に関して近藤ほか(2014)では、日本語母語話者の自動詞受身の使用からの逸脱化を提起しているが、本調査でもそのような傾向が確認できた。

以上、日英母語話者の事態把握の傾向を見てみたが、「怒られる」、「褒められる」といった行為は誰もが持っている経験に近く、普遍的な行為に相当すると思われるが、概念化者である ENS はこういった状況でも問題の事態の話者に関わりを持ってない、もしくは体験的に事態把握できていなかったことが窺えた。このような ENS の事態把握の傾向の結果は、日本語の受動表現の習得にも何らかの影響を与えることが予測できるものであろう。

では、実際 ENS は日本語の受動表現をどのように習得しているだろうか。ここで英語を母語とする日本語学習者(中級、日本語学習歴約4年)1名の産出文(全文)を以下に紹介する。

<中級 ENS 学習者の産出文>

田中君は落ち込んでいて同僚の女性に「どうしたの？」と聞かれている。彼が部長に残業されて、彼女とのデートに行けなさそう。同僚もひどい目にあつたからよく部長が怒るという。もう一人の同僚が来て二人を話しかける。彼が自分の成功について話してちょっと自慢している。田中君はまだ落ち込んでいて女性が心配しているらしいけど、田中君を彼が滑った日のことを思い出される。もっと大変な状況で田中君が TOEIC のテストを受け取る予定なのにお友達と飲み会に行く約束してしまった。男の同僚がまた仕事に戻る。戻りながら、「元気出してよ」みたいなことを言う。田中君は最後にまた女性の同僚にはけられてみている。

(下線筆者)

上記の産出文は同資料の日本語バージョンを見て中上級レベルの英語を母語とする日本語学習者が産出したものであるが、受動表現を用いて表している場面は最初の「聞かれている」しかなく、あとは見られない。当該調査協力者にはフォローアップインタビューを実施したが、受動表現の使用について文法的な知識は持っているものの、実際、どのような場面で使えたらいいのかはよくわからないと答えていた。これは、もう一人の中上級レベルの調査協力者からも同意見があった。このことから英語圏学習者は中級レベルであっても自然な日本語の受動表現を習得し、かつ運用することは簡単ではないことが窺えた。

7. おわりに

本研究では、日英母語話者の事態把握の傾向を、実際の産出文を通して明らかにし、その異同が日本語の習得に及ぼす影響を考えてみた。その結果、日本語母語話者と英語母語話者の間には、事態を捉える際、その認知の仕方が異なること、またその背景には文化の差異も窺えた。そして、このような事態把握の異同から英語圏日本語学習者は日本語の受動表現の習得が簡単ではないことが分かった。

では、英語圏学習者が自然な日本語の受動表現を習得するには、どのような取り組みが考えられるのか。まずは、日本語母語話者の事態把握の傾向を明示的に示すことが考えられる。しかし、それが実際の運用にまで繋がるにはより具体的な取り組みが必要となるだろう。とりわけ受動表現のような日本語特殊な視点を要する表現においては、日本語のウチ・ソト関係を含め、どうして日本語母語話者は言語化しようとする対象との関わり・共感を重視するのかというところに関しても指導が必要であると思われる。今後は、これらの具体的な取り組みについて考えてみたい。

参考文献

- 池上嘉彦 (2006a) 『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』 NHK ブックス
- 池上嘉彦 (2006b) 「「主観的把握」とは何かー日本語母語話者における「好まれる言い回しー」」 『月刊言語』 5月号 大修館書店 20-29.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』 ひつじ書房 49-67.

- 近藤安月子・姫野供子・足立さゆり（2014）「韓国語母語日本語学習者の事態把握－日韓対象言語調査の結果から－」『日本認知言語学会論文集』第14巻 373-382.
- 鄭在喜（2019）『韓国語の事態把握と日本語学習に及ぼす影響－受動表現の産出を中心に－』溪水社
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 濱田英人（2012）「日英語話者の視点構図と言語表現」『文化と言語』76 札幌大学外国語学部紀要 69-92.
- 牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学－文法を文化で切る－』アルク
- 守屋三千代（2011）「現代日本語の「ナル」と「ナル表現」－＜事態の主観的把握＞の観点より－」『認知言語学会論文集』第11巻 560-563

*本研究は早稲田大学特定課題研究助成費（2017S-168、2018B-326）による研究成果の一部である。